まい　あーと■油絵「白い雨が降ってきた」by 田中　允

東京の滝 ⑦

檜原村・花水の滝

北秋川、滝の沢。「小岩」のバス停近くから赤い消火栓を目印に山道へと入る。汗を滲ませながら1キロ程山道を進むと、大きな一枚岩を静かに流れ落ちる滝が出迎えてくれる。かつては鉱泉が湧き、滝の岩盤に硫黄が花模様を作ることから『花水の滝』と呼ばれた。当時、ここで汲まれた鉱泉が風呂に利用されていたというが、大正12年の地震により鉱泉は涸れ、今は昔を忍ぶ名前だけが残る。

「滝の沢」への入り口は赤い消火栓が目印となる。滝の横には山葵田があり夏の日差しに緑がまぶしい。ちょいと１本などという気はくれぐれもおこさぬように。

撮影：中村　伸

ロマン派

アニマル派

えくてびあんレポート

街角のポスト展

立川に気になるポストがある
そのユニークぶりに
つい足をとめてしまうほど
道ゆく人の視線を集め
ひっそりとたたずむポストたちが語る
暮らしの楽しみ方が
耳をすますと
聞こえてきそうだ

ハウス派

町	店名	住所	電話
羽衣町	中島豆腐店	羽衣町2-12-34	☎22-5723
羽衣町	和風レストラン 蔦屋	羽衣町2-27-14	☎26-3698
羽衣町	珈琲屋 らうむ	羽衣町2-27-9	☎26-3643
羽衣町	立川商店	羽衣町2-30	☎22-3565
羽衣町	泰明堂	羽衣町2-31-1	☎22-3353
羽衣町	文具の ないとう	羽衣町2-33-1	☎22-3677
羽衣町	洋菓子サロン ケーキスタジオ35	羽衣町2-6-1	☎27-6808
羽衣町	おそのい時計店	羽衣町2-32-2	☎22-5211
栄町	多摩中央信用金庫 栄町支店	栄町2-66-1	☎36-9711
栄町	手打ちそば 信更	栄町5-12-1	☎37-0991
栄町	相模屋酒店	栄町5-61-8	☎36-2476
栄町	森田接骨院	栄町6-6-25	☎35-6240
錦町	Coffee Shop 遊香	錦町1-4-24	☎27-3840
錦町	和菓子処 ゆうき	錦町1-8-5	☎25-0780
錦町	むぎばたけ	錦町2-1-1	☎26-0210
錦町	池田屋商店	錦町2-1-10	☎22-3731
錦町	寿屋酒店	錦町2-1-13	☎22-3625
錦町	三田花店	錦町2-5-23	☎24-4187
錦町	TAPAS	錦町2-2-29	☎29-0733
幸町	ロッテリア 立川砂川9番店	幸町4-38	☎37-4413
幸町	たちばな	幸町5-2-16	☎37-0347
高松町	自然食 ぱれあな	高松町2-1-23	☎24-4560
高松町	多摩画材	高松町2-1-25	☎22-6031
高松町	洋菓子 マリアン	高松町2-10-22	☎24-3912
高松町	山梨中央銀行 立川支店	高松町2-16-13	☎26-1571
高松町	新藤青果店	高松町2-3-13	☎22-6443
高松町	丸助青果店	高松町2-4-18	☎22-3542
高松町	肉の専門店 伊勢屋	高松町2-6-20	☎24-2734
柴崎町	ほわいとはうす	柴崎町2-9-28	☎24-1610
柴崎町	ビジネスホテル クボタ	柴崎町2-12-23	☎22-1122
柴崎町	いなげや 立川南口店	柴崎町2-12-24	☎26-2947
柴崎町	寿司由	柴崎町2-2-8	☎22-3733
柴崎町	輪輪館	柴崎町2-12-17	☎22-8100
柴崎町	㈲関田酒店	柴崎町2-2-17	☎24-2960
柴崎町	ユウ都市企画	柴崎町2-3-13	☎28-2566
柴崎町	ラ・バンバ	柴崎町2-3-3	☎24-5800
柴崎町	コミュニティ・ストア はなむら	柴崎町2-3-9	☎22-2491
柴崎町	オーロール焼きたて 立川店	柴崎町2-4-15	☎27-9473
柴崎町	北京大飯店	柴崎町2-4-19	☎22-6393
柴崎町	ななや	柴崎町2-4-22	☎25-6980
柴崎町	田中星美堂薬局	柴崎町2-5-3	☎22-3913
柴崎町	菊川園	柴崎町2-5-6	☎26-2035

手作りの安全を配達して

都市化の進む立川にもまだ駐在所がある。その土地に暮らし、地域を考える駐在さんの仕事は犯罪を取り締まるということだけではない。住宅の密集する地区で手作りの新聞「駐在所だより」を発行しながら住民と一緒に地域に取り組まれている一番町六丁目駐在所・大久保晋さんにお話をうかがった。

一番町六丁目駐在所。気をとめて見なければ普通の交番としか眼に写らないこの駐在所に、大久保晋さんが着任したのが平成7年の2月。以来、家族と共にこの駐在所を守っている。

立川警察署に配置になってから数えると通算で10年になる大久保さんは「駐在になるなら、10年間見続けて来た立川で」と現在の駐在所に着任。担当地区の住民が安心して生活を送れるように独自のアイデアで取り組んでいる。

その一つが、「駐在所だより」という手作り新聞。「駐在所の仕事はまめな自分にあっているんです」と言うだけあって、手作り新聞にも細やかな心配りがみえる。警察関係の発行物は縦書きが慣例のところ、地区の発行物のほとんどが横書き。一緒に掲示板に張り出されると、違和感がある。それならばと、手作り新聞は横書きにされた。

授業の一環として駐在所を見学に訪れる小学生には自ら種をまき育てた朝顔を帰り際に持たせる。良いことをしていれば校長先生に「朝礼で褒めてあげて下さい」と電話を入れる。盗難にあったバイクが見つかったときには、きれいにして油をさし持ち主に返して喜ばれた。「もし自分のバイクがボロボロになって返って来たら」と持ち主の気持ちになってのことだ。

地区内を巡回すれば積極的に住民に声をかけていく。そんな小さな積み重ねから同じ地域住民として"大久保さん"と名前で呼んでもらえるようになった。「辛いのは、声をかけてくれた人の名前が出て来ない時です」という大久保さんの担当区域はおよそ二千七百世帯、約一万人が住む住宅密集地区。なかには声をかけ合うような人とのつながりを喜ばない人もいるという。「淋しいことですけれど、だんだんこの辺りも都会的になってきているんですね」と語る。

警察官としてではなく、家族と一緒にこの土地に暮らしている駐在さんとわかれば見る目もかわり、親しみもわいてくる。「大久保さんとして挨拶をしてもらえるようになれば、その人はここで絶対に悪い事をしないですよ」と言い切る。人と人とのつながりの中から犯罪を起こさせない環境をつくっていく、取り締まるだけが駐在さんの仕事ではない。

駐在所の横にある庭は、きれいに刈り込まれた芝生が目をひく。「駐在所の仕事は庭の手入れと同じで、まめにしていかないとすぐに雑草が生えてくる。団地の人にも言うんです、きれいに並んだ自転車は盗まれないから自転車置場をきれいに保つように。雑然としていれば自然に盗んでやろうかという気になるんです」とも語る。

住民との関係をつねに温かい血のかよったものにしていれば、自然に雑草は少なくなっていく。

「今はもっと時間があればと思いますね。やりたいことはたくさんあります」と熱っぽく語る。先日は地元の運動会に警察の騎馬隊をよんで住民の人たちに喜ばれた。

「どんな人とも目線の高さを同じにして話をすれば、必ず話を聞いてくれます」本当に相手の立場、住民の立場に立ったときには、おのずとするべきことが見えてくる。それは地域住民として共に暮らす駐在さんだからこそできることのようだ。

約二千部発行の『駐在所だより』も場所によっては一軒いっけん歩いてポストに入れて行く。たくさんの人に駐在所の存在を知ってもらうためでもあり、また駐在さんが回ってくる地域となれば、犯罪の抑止効果にもつながるからだ。

「いってみれば、手作りの新聞で安全を配達していることになるんです」という大久保さんは最後に「やるからには他の人には負けたくない。日本一の駐在所をめざします」と結んだ。

〔お詫びと訂正〕
先月号、本欄記事『歴史の重さ、三冊』の中で紹介させていただいた本、「立川の建物疎開の記録」に関する記述の中に誤記がありました。本文下段三行目、「学童疎開」とあるところは「建物疎開」の誤りでした。お詫びして訂正させていただきます。

編集者の手

日本経済新聞社
生活家庭部記者
磯　哲司

ちょうど一年前の95年4月、日本経済新聞の夕刊でタウン誌を週に一冊づつ紹介するコーナー「街、読み歩き」がスタートした。私を含む生活家庭部の記者数人が交代で取材するコラムだ。ワーキングウーマンや官庁などが対象の通常の取材と違い、ミニコミとその編集者という、サイズは小さいもののメディア相手の取材である。

編集長たちと話し込んで感じたのは、長く続いているミニコミには、続いただけの理由が在るという、極めて単純なことだった。

ほとんど商店街のチラシのような体裁のミニコミも、地域の歴史に対する極端に考証学的な記事しか載せない方針のミニコミも、それぞれ地域の読者の心に存在がビルトインされているのだ。ビルトインされなかった雑誌は読者、次いでスポンサーに見限られ、消えていく市町村の広報誌でもない限り、サバイバル競争は大変なもの。生き残りのポイントは読者の心の中に一定の位置を占められるかどうかである。

かくいう私にも二十年近く前の高校時代、熱烈に投稿を繰り返していたミニコミ誌があった。当時、北関東の高校生だった私にとって、そのミニコミ誌に友人のうわさ話やコントといった雑文が載ることは非常な名誉だった。これは同級生たちにも共通していた。プロの編集者に、自分の持ち込んだ情報が価値あるものと判断される。それがよかったのだ。高校という日常的システムの内側から外に向けて伸ばした手を、編集者がにぎり返してくれた嬉しさといえるだろう。

私たちとそのミニコミの編集部は誌面を通じて同じ方向を見ていた。やっと「ポパイ」「ホットドッグプレス」が出始めたばかりの当時、そのミニコミは都会に比べて大幅に遅れていた若者のファッション意識や遊びのスタイルにカツを入れようと盛んにその手の特集を組んでいた。今思えば、雑誌が若い世代の動きを追えなくなってきている現在の東京では、まず成立しないコンセプトの誌面だったと思う。

しかし、ミニコミと北関東の高校生がかつて結んでいた蜜月関係は、今の時代ではなかなか成立しないのではないかと思う。なぜなら、みながメディアを持てる時代がスタートしてしまったからだ。パソコンとモデム、電話さえあれば、ミニコミやマスコミなどメディアの手を借りなくても、パソコン通信やインターネット経由で、とにかく情報を発信することはできる。気むずかしい編集者に取捨選択されることもない。ホームページを立ちあげている仲間数人でリンクを張れば、雑誌のような空間も簡単に出来てしまう。

では、これからの時代のミニコミはどう変わるのだろう？家庭にパソコンが入るのに合わせ、ホームページ形式で記事をインターネットに載せる方向がまず考えられる。お年寄りの書いた郷土の歴史に関する随筆が、ネットで世界を流れるのも悪くない。

しかし、取材で出会った編集長たちの多くは、こうした方向に否定的だった。「かばんに入れて持ち歩けない「ビデオ雑誌だってほとんど残っていないのに電子雑誌がよまれるはずがない」などの声が代表だ。しかし、最も彼らが懸念していたのは、編集者が誌面にかけている思いが、読者に伝わらないのではないか、という疑問だったように思う。恐らくその思い入れこそが、私が高校時代に感じていた編集者の手のぬくもりの正体だ。

私が投稿を繰り返したミニコミ誌が今も残っているかどうかはわからない。北関東のその街でも、高校生の制服も詰め襟からスマートな紺ブレに変わり、かっての田舎っぽさは失せている。昨年生まれた私の子どもは、私が持ったような地編集部との関係を、どこで味わうことになるのだろうか。

えくてびあんエッセイ●No.42

ウォッチング

再開発の中の緑

立川駅南口の風景。再開発が進む中に緑の一群がある。ビルに囲まれていた時には気にかけることもなかった緑が、今はぽっかりと浮き出ている。木々に囲まれて建つ家は「蔦葛の洋館」とはいかないまでも、家と土蔵に蔦が絡まる景色がコンクリートと申し訳ないように立つ街路樹だけの街並みに鮮烈な印象を与える。いずれこの景色も過去のものとなるのだろうが、駅前にこんもりと緑がある景観だって捨てたものではない。再開発の行き着く先を考えてしまう風景である。

WATCHING

表紙は語る

まい あーと
油絵
「白い雨が降ってきた」
by 田中 允

ファンタジックな今回の作品は画家として活動するかたわら、子供たちにも絵を教えているという田中允さんの作品。武蔵野美術大学を卒業後、油絵を描き続けて現在はAJAC（画家組合）代表。眼に見えないものや形にならないものを描いてゆきたいという田中さん。「絵は観る人のその時の心境を写すものだから題名なんてなくてもいいんです。自由に想像してほしい」と語り、「戦争や災害があったら絵なんて何の役にもたたない」ともいう。休みの日には野山を歩く。目的を作らずきれいな景色に出会ったら電車を降りて歩いてみる。急がず力まず、日々を自然体で送る。マイペースで歩み、独自の視点でものを見ていくところから、田中さんの絵の魅力は生まれてくるのではないだろうか。

東風

私信がすっかり少なくなった。家庭でもそうだが、仕事上のメールボックスでも手書きの手紙がぐんと減ってきているように思う。DMの類が圧倒的なのは、どちら様も同じであろう◆どうしてであろうか。ひと言でいえばシンドイからであろう。万年筆にインクをみたし、便箋、封筒を用意するだけでも習慣になっていない人にはシンドイことである。拝啓のあとに季節の挨拶を書くのも慣れていないし、その上、自分の文章を組み立てなければならない。結びの挨拶にも結構、気をつかうものである。用件だけなら、ファクシミリがある。コンピューターで「通信」をすることも出来る。「手紙」などという通信方法は、もう時代遅れなのであろうか◆文字通信よりも手軽くできるのは「声」であろう。普通の電話では足りないらしく、携帯電話が花盛りである。喫茶店で、歩きながら、自動車を走らせながら、周辺の迷惑なんぞは何のその、携帯電話のお通りである。便利なものが流行る、当り前といえば当り前の話である◆だが、少数ながら「手紙派」がいないわけでもない。手紙を出すのは面倒でも、受取るのは嬉しいものであろう。他のどんな通信手段にもない大きな魅力がある。魅力があまりに大きすぎて、現代人には見えなくなってしまったのであろうか◆えくてびあん　来信受けて暑気払い

（編集）池田隆男　本田敏一　小杉和己　小林康史
陽川　理　名尾惠真　岩井正弘　町田健一
山田恵子　松本わかこ
（写真）天野武男　板橋一明　井上義治
スタジオ269　中村　伸　五来孝平

真如苑だより

名ばかりの梅雨も終わり、夏休みの子供たちは元気に走り回っています。8月。待ちにまったオリンピックの熱い戦いも、どうやら今年の暑さに一役買っているようです。真如苑では今月も皆様のお越しをお待ちしております。涼しいひとときをお過ごし下さい。

■日時　8月19日(月)
2時～4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

月刊 えくてびあん　第145号
平成八年八月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F　〒190
電話　○四二五（28）○○八二
FAX　○四二五（28）一二九七
編集発行人　立井啓介
印刷所　㈱大廣社

えくてびあんの輪

人がゐて、街があります。
あなたがゐて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも えくてびあん！

町	店名	住所	電話
柴崎町	café コロラド	柴崎町2-5-8	☎26-2285
柴崎町	スタジオ269	柴崎町2-8	☎27-0269
柴崎町	東陶房	柴崎町2-9	☎25-0079
柴崎町	ロッテリア 立川南口店	柴崎町3-1-3	☎22-3928
柴崎町	笠井紙店	柴崎町3-13-24	☎22-8601
柴崎町	矢沢歯科	柴崎町3-16-2	☎25-6600
柴崎町	割烹 紀ノ川	柴崎町3-4-3	☎25-5825
柴崎町	ラ・フィネ	柴崎町3-5-2	☎25-2179
柴崎町	ヨシダ貴金属店	柴崎町3-5-4	☎22-2448
柴崎町	東京相和銀行 立川支店	柴崎町3-6-17	☎22-2171
柴崎町	オリオン書房	柴崎町3-6-27	☎25-3111
柴崎町	あさひ銀行 立川支店	柴崎町3-6-29	☎22-4161
柴崎町	イスパニスタ	柴崎町3-6-3	☎22-2969
柴崎町	入船寿司	柴崎町3-6-32	☎22-2474
柴崎町	サンカメラ	柴崎町3-7-22	☎22-3336
柴崎町	和光証券 立川支店	柴崎町3-8-2	☎24-1321
柴崎町	東京都民銀行 立川支店	柴崎町3-9-21	☎22-7107
若葉町	美容室 リラ	若葉町1-11-1	☎36-3048
若葉町	みふじサイクル	若葉町1-12-4	☎36-7166
若葉町	紀ノ国屋 立川店	若葉町1-13-2	☎36-1604
若葉町	エッソ石油 けやき台ステーション	若葉町2-1	☎35-3081
曙町	大晋商事	曙町1-23-9	☎25-3110
曙町	オリオン書房 ルミネ立川店	曙町2-1-1	☎27-2311
曙町	ビューティータナカ ルミネ立川駅ビル店	曙町2-1-1	☎27-6917
曙町	東京赤十字血液センター 立川出張所	曙町2-1-1	☎27-1140
曙町	朝日カルチャーセンター 立川	曙町2-1-1	☎27-6511
曙町	ロッテリア 立川ルミネ店	曙町2-1-1	☎24-7433
曙町	オルゴール・雑貨 グーシーハウス	曙町2-3-7	☎25-2588
曙町	立川リージェントホテル	曙町2-11-7	☎22-1133
曙町	喫茶アバン	曙町2-17-15	☎27-4479
曙町	ホワイトハウス フロム中武	曙町2-11-2	☎25-8558
曙町	ケンタッキーフライドチキン 立川支店	曙町2-12-16	☎28-2636
曙町	伊勢丹 立川店 受付	曙町2-12-2	☎25-1111
曙町	三菱銀行 立川支店	曙町2-13-3	☎24-4121
曙町	トポス 立川店	曙町2-18-18	☎25-0331
曙町	オリオン書房 第一デパート店	曙町2-2-25	☎23-3311
曙町	印章の 宝山堂	曙町2-4	☎25-0111
曙町	アルビヨン	曙町2-4-28	☎25-3824
曙町	お菓子の家 エミリーフローゲ	曙町2-4-28	☎27-4138
曙町	アンキャフェ・エミリー・フローゲ	曙町2-4-30	☎26-1818
曙町	クリムト	曙町2-4-30	☎26-3030
曙町	第一勧業銀行 立川支店	曙町2-4-30	☎22-5151
曙町	シェ・タスケ	曙町2-5-14	☎27-5959
曙町	さくら銀行 立川支店	曙町2-6-11	☎22-2151
曙町	サヴィニ	曙町2-7-10	☎25-1662

新連載

立川昆虫記 1

絵・文 中西　章（若葉町）

【アブラゼミ】

カメムシ目セミ科

立川のセミでは最大の数。毎年7月20日前後から9月下旬頃まで成虫の声と姿が見られる。サクラ、ケヤキ、ナシの木を特に好み、幼虫は土中の根で、成虫は幹で樹の汁液を吸う。卵から成虫になるまで7年間を要する。セミは鳴く時間が種によって決まっていて、アブラゼミは午後型である。街灯のそばでは夜でも鳴いている事がある。天敵が多く、土中ではモグラに、地上では、とり、クモ、カマキリなどに補食される。鳴き声は、ジリ、ジリ、ジリ、と、いかにも暑そう。